

# 学習場面における子どもの自己選択能力についての研究

佐々木 麻衣（上越教育大学学部）

## 要 約

本研究では、学習場面において子どもが自分自身の判断で“他者と関わること”や“1人で考えること”等の「学ぶ手段」を選択できている実態について調査した。

その結果、自由に学び合える環境の中でも課題達成の手段として、必要に応じて「自分1人で考える」という方法を選択出来ることや、教師からの情報に対しても自分に必要かどうかを判断していること等が明らかになった。

〔キーワード〕 学び合い 自己選択 学ぶ手段 つまずき 教師

## 研究の背景と目的

今日、さまざまな教科教育の研究において、子ども相互の学び合いに関する研究が発展してきている。川合（1999）では、「教え合い・学び合い」の研究から、中学生がお互いの進歩の段階をふまえてアドバイスできることを明らかにし、学習者の持つ力を信じることによる学習効果を示唆している<sup>1)</sup>。水落（2002）では、子どもの相互作用を活用し、本来子どもが持っている能力を發揮できる環境を整えていくことが効果的であることを明らかにした<sup>2)</sup>。

これらのことより、子どもが本来持っている力を生かす授業の必要性が明らかとなっている。これまでの学び合いの研究においては、子どもの実態を明らかにし、子ども同士の関わり合いについて実証的に示しているものが多い。

また、田辺（2002）によって子どもが授業時にもコミュニケーションによる人間関係構築を望んでいることを明らかにしている<sup>3)</sup>。このようなことより、子どもが自由に学ぶ場を求めていることが明らかになっている。

しかし、これらからは子どもがどのような時にコミュニケーションによる学び合いを求めているのかは明らかとされていない。また、学び合いの起こる授業の必要性を述べているが、実際に学校現場で行われている指導とのギャップについて示したものはない。

よって、本研究では「学習場面において、子どもが自分自身の判断で『学ぶ手段』を選択できるという実態について明らかにすること」を目的とする。

## 調査について

新潟県内公立小学校3年生1クラス（34名）を対象に観察者として参加した。教室全体に3台のVTRと7台のテープレコーダーを設置し、子どもと教師の言動を記録した。

## 第1次調査

2002年12月の期間に音楽科「いい音えらんで」の単元で2単位時間行った。授業内の子どもが自由にリコーダーの練習を出来る時間に注目し、教師と子どもの関わりについて調査した。

## 第1次調査の結果と考察

### <教師の直接指導>

練習時間内に、直接教師と会話することができたのは約半数の子どもだった。また、教師から直接学習指導を受けたのは3割程度の子どものみであった。

以上のことから、子どもが自由に活動できる授業内で、教師が直接子ども全員と関わることは困難なことが明らかになった。

## 第2次調査

2003年2月の期間に理科「つくってあそぼう」の単元で磁石を使ってのおもちゃ作りを3単位時間行った。

子どもは自由に会話や立ち歩きを行うことが出来る環境の中で、各自が自由におもちゃ作りを行うことができた。このような自由に学び合える環境の中での子どもの実態を調査した。

## 第2次調査の結果と考察

### <情報取得について>

『自分1人で考えることができる』

何を作るか考える上で、約50%の子どもが他者からの情報を求めずに、自分1人で考える手段を選択していた。

『ちらっと見ることを情報取得の方法にする』

おもちゃを決定するために、相談して決めた子どもは30%程度であり、ちらっと見て情報にした場合が多かった。(ちらっと見るというのは、近くの席の子の様子を覗き込むことや、立ち歩いた時に様子を見る等の相手と直接関わらない行動のことである)

以上のことから、子どもは他者と自由に関わることができる環境の中でも、情報を取得できる上、自分1人で考えることから離れずに、課題を進めていくことが明らかになった。

### <つまずきの解決>

『自分で手段を選択し、つまずきを解決できる』

	答え	思案	ヒント
回数(回)	38	25	230
割合(%)	13	9	78

(全293回)

「ヒント」として子どもからの情報を必要とする場合が80%を占め、教師や教科書等の「答え」を求める場合や1人で考える「思案」はそれぞれ10%程度であった。子どもはその時々で、自分に何が必要か判断し、解決のための手段としての情報を選択していた。

『自分に必要のない情報を遮断する』

作業に集中している場合、周りの子どもから新しい情報を与えられても、ちらっと見て確認をするのみで、すぐに作業に戻っていた。

以上のことから、子どもは課題につまずいた時、自由に手段を選択できる環境がある場合には、自分で解決するための手段として、情報を必要とすることが明らかになった。したがって、自由に情報を取得できる環境が必要である。

### <教師の存在>

『教師からの情報を選択することができる』

教師が自分以外のおもちゃに感動し、大きな声

で褒めている場合でも、約70%の場合が自分の作業に集中していた。

《反応のない例》



教師Tがaのおもちゃに「なるほどーっ」と大きな声で感動している。cは全く見ずに、自分の作業に集中し続けている。

反応をする場合でもちらっと見て、作業に戻るが多かった。また、子どもは必要な情報だと判断した場合には、教師が離れた後もその場に残り、その情報を確認し続けた。

以上のことから、子ども自身が考えることができる授業の中では「教師」も1つの情報源となることが明らかになった。

以上をまとめると、子どもは必要に応じて「学ぶ手段」を選択する力をもっていることが明らかになった。そして、そのためには今まで以上に自由に手段を選択する環境が必要となると言える。

### 結論

子どもは自由に「学ぶ手段」を選択できる環境の中で、自分に必要な手段を選択し、自分の力で課題を解決できることが明らかになった。

### 今後の課題

本研究では、教師が褒めている場面について特定の見解しか得られなかった。しかし、教師の「褒め方」にはさまざまな形がある。

今後は教師の伝え方の違いによって、子どもにどのような変化があるのか取り上げていきたい課題と考えている。

### 【引用文献・参考文献】

- 1)川合千尋:「小学生の理科学習における話し合い活動に関する研究」,上越教育大学修士論文,1999
- 2)水落芳明:「相互作用によるメディアリテラシーの発展に関する研究」,上越教育大学修士論文,2002
- 3)田近洵一:「子どものコミュニケーション意識」,学文社,2002